

テーマ：貿易統計（2015年12月）

発表日：2016年1月25日（月）

～実質輸出は10-12月期増加も、先行き不透明感は燻る～

第一生命経済研究所 経済調査部
 担当 副主任エコノミスト 高橋 大輝
 TEL：03-5221-4524

	貿易収支(億円)				輸出数量						輸入数量							
			輸出金額		輸入金額		アメリカ		EU		アジア		アメリカ		EU		アジア	
	原数値	季調値	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	
15	1月	▲11738	▲3552	17.0	▲9.1	11.1	2.9	6.4	15.4	▲6.3	▲14.7	▲7.8	▲9.9					
	2月	▲4285	▲6241	2.5	▲3.6	▲2.1	1.9	3.3	▲3.4	4.5	▲10.0	▲5.5	11.3					
	3月	2227	▲197	8.5	▲14.4	3.2	5.8	13.7	3.3	▲10.3	10.5	▲9.4	▲15.9					
	4月	▲593	▲2382	8.0	▲4.1	1.8	7.1	5.2	0.1	0.1	4.6	▲3.7	▲4.4					
	5月	▲2206	▲2003	2.4	▲8.6	▲3.8	▲6.7	1.4	▲2.3	▲5.3	1.7	▲7.3	▲8.8					
	6月	▲744	▲2773	9.5	▲2.9	0.0	▲3.0	6.5	3.2	▲1.4	3.8	▲5.4	▲1.6					
	7月	▲2705	▲3557	7.6	▲3.1	▲0.7	▲0.2	5.5	▲0.4	▲2.9	1.6	▲0.6	▲2.6					
	8月	▲5715	▲3381	3.1	▲3.1	▲4.1	▲7.7	▲5.0	▲3.3	▲0.7	6.7	1.0	▲1.6					
	9月	▲1200	▲2934	0.5	▲11.0	▲3.9	▲4.7	2.1	▲4.2	▲1.9	▲0.9	▲8.7	▲3.0					
	10月	1048	▲1890	▲2.2	▲13.3	▲4.6	▲5.8	3.3	▲2.4	▲3.8	▲7.0	▲7.6	▲4.1					
	11月	▲3813	224	▲3.3	▲10.2	▲3.1	▲8.1	9.3	▲3.8	1.6	▲0.4	2.7	▲3.0					
	12月	1402	366	▲8.0	▲18.0	▲4.4	▲8.4	5.0	▲0.8	▲5.0	▲8.3	▲5.3	▲4.1					

(出所)財務省「貿易統計」

○輸出入ともに減少

12月の貿易統計が財務省より発表され、貿易収支は1,402億円の黒字（コンセンサス：1,100億円、レンジ：▲2,240～7,455億円）となった。

輸出金額は、前年比▲8.0%（コンセンサス：▲7.0%、レンジ：▲9.5%～▲2.1%）と3ヶ月連続の減少となった。輸出価格が前年比▲3.8%と低下、輸出数量は同▲4.4%と減少幅が拡大し、価格、数量の両面が下押しとなった。輸出数量が軟調に推移する中、円安による価格の押し上げ（為替レート 11月：同+8.9% 12月：同+3.4%）は弱まっており、輸出金額は伸びにくい状況となっている。輸入金額は同▲18.0%（コンセンサス：▲16.4%、レンジ：▲20.0%～▲12.2%）と12ヶ月連続の減少となった。原油価格の下落に伴い輸入価格が前年比▲13.7%と減少幅を一段と拡大、輸入数量は同▲5.0%と再びマイナスに転じた。総じて見れば、12月は輸出入ともに弱い結果だったと評価される。

季節調整値では、輸出金額が前月比▲3.8%、輸入金額は同▲4.0%となった。輸出入ともに大幅減少となったが、輸入金額の減少幅が輸出金額の減少幅を上回ったことで貿易収支は366億円の黒字となった。季節調整のかけ直しによって11月の貿易収支も黒字となったことから、貿易黒字は2ヶ月連続である。原油価格の下落を主因とした輸入金額の減少を背景に、貿易収支は黒字方向への推移となっている。なお、2015年の貿易収支は2.8兆円の赤字（2014年：12.8兆円の赤字）と、原油価格の下落による輸入金額の減少を背景に、赤字幅を大きく縮小した。

○10-12月期の実質輸出は前期比+2.2%と増加

為替などの物価変動の影響を除いた実質輸出（実質化、季節調整は第一生命経済研究所試算）は、前月比▲4.4%（11月：同+2.7%）と4ヶ月ぶりの減少となった。財別にみると前月大幅増加した「その他」が急減しており、反動の面も大きかった。ただし、一般機械の減少基調が続いていること、電気機器が急減していることなどを踏まえると、反動の面を除いても弱い結果だったといえよう。

それでも10、11月と高めの水準だったこともあり、10-12月平均の実質輸出は前期比+2.2%と増加した。国別に10-12月期の実質輸出をみると、米国向けが同+3.2%と2四半期連続の増加となったほか、欧州が前期比+6.3%と大幅増加した。米国向けは引き続き増加基調が続いたものの、振れの大きい「その他」によ

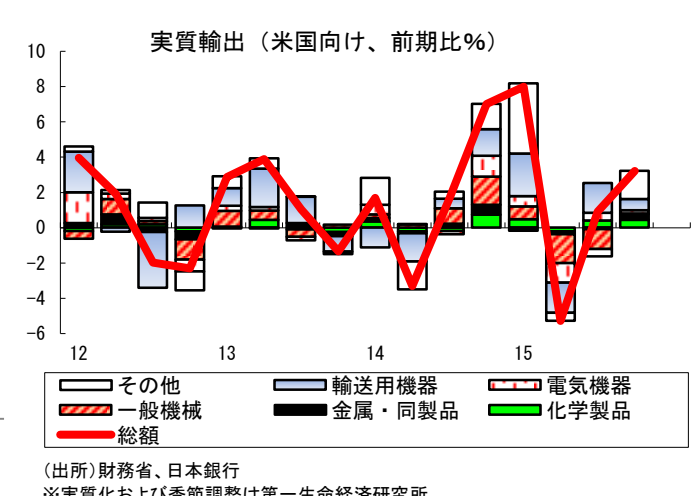
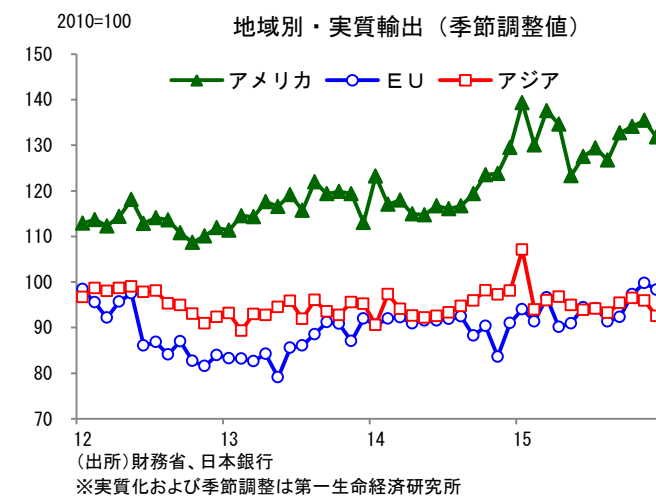
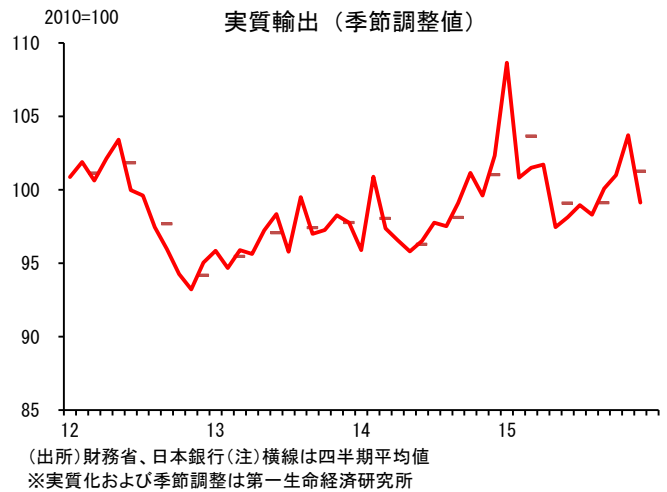
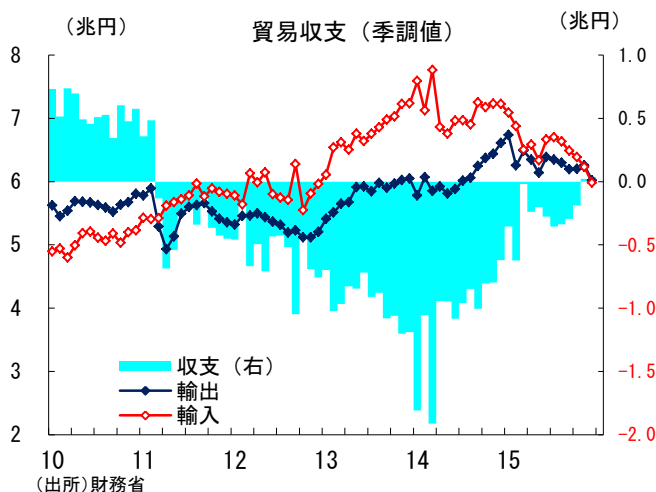
る押し上げが大きく、増加ペースについては一部割り引いて見たほうがいだろう。欧州向けは輸送用機器が前期比+16.1%と大幅増加したほか、幅広い項目で増加が確認でき内容も良好だった。また、これまで足を引っ張ってきたアジア向けについては同+0.8%と3四半期ぶりに増加した。内訳をみると、影響の大きい中国向けが同+3.7%と4四半期ぶりに増加したほか、ASEAN向けが同+0.4%と3四半期ぶりの増加となった。もっとも、これまでの落ち込みを考えれば戻りは限定的であること、NIEs向けは同▲1.4%と3四半期連続の減少となったこと、中国の製造業は依然低迷が続いていることなどを踏まえると、まだまだ楽観できる状況にはないだろう。

以上のように、実質輸出は均してみれば回復基調を辿っているものとみられるが、一般機械の減少基調や12月の電気機器の急減、アジア向けの回復の鈍さなど懸念される点もある。実質輸出の実勢は12月の急減が示すほど悪くないと思われるが、先行きには依然慎重な見方が必要だろう。

○実質輸出は増加傾向を予想も、依然不透明感は燻る

先行きの実質輸出を展望すると、基本的には海外経済の持ち直しを背景に緩やかな増加を見込んでいる。米国経済は雇用・所得の改善を背景とした個人消費、住宅市場の回復を下支えに改善が続くと予想され、欧州経済は原油安・ユーロ安、追加金融緩和の効果浸透などを背景に回復基調を辿るだろう。また、中国経済についても、政府による景気支援策などを背景に底堅い状況が続くと見込んでいる。

一方で、足元で米国、中国の製造業が軟調に推移している点は気がかりだ。また、新興国については米国の利上げに伴う資金流出が成長の足かせになる可能性があることなど、不安要素が残存しており、リスクは下振れである点には注意が必要だ。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。